

震災ボランティア派遣 FAX通信②



2011年8月9日

週末ボランティアもOK!

各組合・地域労連

御中

青森県労働組合総連合

青森市大野字若宮165-19

TEL 017-762-6234、FAX 017-729-2186

メール ao110@kenrouren.jp

【発信者】事務局長 有馬美恵

高教組チーム 片桐さんの感想

青森高教組 書記長 片桐 拓 (38歳)



7月24日(日)

高教組チームは大人3人(30代2人、50代1人)と若者1人の合計男4名。正午に谷崎チームリーダーの車で教育会館を出発し、青森中央ICから高速に乗り、東北自動車道水沢インターで降り東に向かい、奥州市江刺区井出の山あいの民宿「かめや旅館」に宿泊。1日早く岩手入りしていた同宿の福岡県労連のメンバーからボランティアセンターの様子を聞く。ここは食べきれないほどの夕食と朝食で、夕食のメニューはハンバーグと刺身と焼き魚と冷やし中華とご飯でした。この宿は1泊だけでしたが、たいへんごちそうになりました。

7月25日(月)

朝8時に宿舎を出発し、9時過ぎ陸前高田ボランティアセンターに到着。ボランティアセンターは陸前高田市内陸部(北部)の横田町にあり、着いた時には大型バスが数台止まっていた。バスで来るような団体ボランティアは事前予約制で早い時間から受付を開始しているようだった。我々のような数名以下の一般ボランティアは9時受付開始で、「マッチング」(ボランティアを求めている人=求人と、ボランティアをしたい人=求職者、をスタッフがつなぐこと)のコーナーでボランティアの仕事もらう。高教組チーム4人が登録すると、我々の団体名(教職員組合)を見たスタッフが、「復興の湯」の礼状書きの仕事をくれる。夏場はボランティアは14時で終了です、などの説明を受ける。

ボランティア先の共和建設(高田一中の近く)に到着。建設会社と「復興の湯」という名の風呂屋とのつながりが最初は全く分からなかったので話を聞いてみた。3月21日頃、津波で被災した近所の人のために、社長の高萩善夫さんが建設会社の資材置き場に仮設のお風呂を作

6月初旬にNHKのラジオで「復興の湯」が紹介されると、100名を超える全国の視聴者からタオルや石鹸などの物資が届けられた。社長は一人ずつに手書きの礼状を書きたいが、間に合わないので手伝ってほしい、とのことだった。途中から地元出身の青年が1人加わり、礼状書きの仕事は12時には完了。午後は会社の隣りで社長も入居している仮設住宅におじゃまし、「復興の湯」の話聞く。社長は、今度は本物の温泉をボーリングで掘り当て第三の「復興の湯」を作りたい、1日の仕事を終えて集まり交流できる場としての「復興の湯」を残したい、

7月26日(火)

同じ宿の福岡県チームと合わせて7人でボランティアセンターへ行く。石材店で石材を運ぶ仕事をもらう。石材店と聞いて、墓石を運ぶのだらうかなどと考えながら竹駒駅近くの現場に行くと、ガーデニング用のブロックやレンガ、敷石などを木製のパレット(すのこ)の上に並べる仕事。この会社は東北6県のホームセンターにガーデニング用の石材を卸していたが、工場が地震で被災したのを機に廃業し、賃金が払えないので従業員を解雇、ところが在庫の石材を置いている土地を返す必要があり、後片づけのための手作業の人手が必要、ということらしい。重い石材もあるので腰に気を付けて作業する。かんかん照りの中、ホコリまみれになる。

<感想>報道によれば福島も宮城も大変だが、岩手だって陸前高田も大船渡も、復旧にはまだまだ人手と時間がかかるだろうと感じた。中心部が壊滅的な被害を受けた陸前高田は、今後の街づくりをどうするかという問題もある。今回のボランティアはたったの3日間で、現地の復旧を進める手助けになったのかよくわからないが、岩手の現地の人とのつながりをつくることができた。私たちが被災地の岩手を忘れることなく支援を続けることが必要なのだと思う。ボランティア先で出会った共和建設の社長さんは、現地の復旧・復興について色々とアイデアを持っているようだった。青森から様々な形での支援ができれば、面白いと思う。今回、隣県の岩手県にボランティアへ出かけるきっかけを与えてくれた青森県労連に感謝している。現地岩手の皆さんも、おもてなしの心で迎えて下さいました。ありがとうございました。

7月27日(水)

最終日。朝食前に宿舎の「あづま荘」近くの漁港を散歩する。高さ6メートルの堤防が集落を守っていたが、水門のところから津波が集落を襲い、家々を流したようだ。「あづま荘」から歩いてほんの2~3分の場所である。福岡チームと別れ、9時前ボランティアセンターに到着。土砂降り。津波で半壊の民家のガレキ片付けの仕事をもらう。カーナビを頼りに陸前高田市南西部の気仙町を目指し道なき道を進むが、渡るべき橋がない。津波で流された模様。一番下流に仮設の橋があり気仙川を渡るが、道がわかりにくく右往左往する。ようやく現場に着くと晴天。家の母屋の前庭に住宅の戸板や梁などの木材、トタン、冷蔵庫などの家具、タイヤなどが山になっている。それらを家の表に搬出し、運びやすいようにする。4か月間電気が通っていなかった冷蔵庫は、腐った臭いがして運ぶのに苦労した。気仙川より西側のこの地区は、中心部に比較してガレキの片づけなど進んでいない様子だった。12時作業終了。